

カリフローレにおける農薬残留評価

【背景と目的】

2019 年にカリフローレがカリフラワーの品種として農薬登録の適用作物分類表に表記され、カリフラワー登録農薬を使用できることとなった。そのため使用可能な農薬は多いが、安全性についての実証は不十分である。そこで、カリフローレにカリフラワー登録農薬の残留挙動を作物残留試験により解明し、その安全性を評価する。

【研究概要】

「カリフローレ 80」と「ホワイトベル」を農総研露地圃場および施設内に定植し、慣行栽培を行い、供試4農薬は登録内容の最大施用量を単独施用した。最終施用後にそれぞれの区から5株を採取し、計1kgを供試した。分析は、LCMSMSを用い厚生労働省の公定法に準じて開発し、妥当性を評価して採用した方法で残留農薬濃度を定量分析した。

- (1) アセタミプリド：他事業を含め4年間試験を実施したところ、栽培条件によって残留濃度が変化することが明らかとなった。2022年の収穫時は、基準値の9割ほど残留した2019年と同様に結露による流出がなかったことが残留基準値に近い値となった一因であると考えられる。
- (2) クロルフェナピル：散布3日後における残留濃度は露地・施設ともに基準値と比較して低位であった。
- (3) フルベンジアミド：散布1日後における残留濃度は露地・施設ともに基準値と比較して低位であった。
- (4) チアメトキサム：散布7日後の残留濃度は露地・施設ともに基準値と比較して低位であった。
- (5) 試験したすべての農薬で「カリフローレ 80」における残留濃度は、ホワイトベルよりも高く推移した。